

長編小説の鑑賞試論

——事象（心象）と人間像の相關把握へのアプローチ——
 “阿部知二「冬の宿」を素材に”

上 村 敦 之

○ この小論の骨格

(1) 長編小説の鑑賞方法として、各章単位の有機的構成に着目し、各章独自の世界を一つのマスにまとめるべく試みた。（この小説の場合十四章）

(2) 各章のストーリー展開を事象ないし心象として縦軸に配した。小説は、行動の展開（事象）および、主人公の分身に映ずる心情（心象）がその構成の主因をなすと考えたからである。又、横軸には、人物像（→人間像）を充て、その章の主要登場人物の事象および心象との係わりを見ようとした。

(3) かく、各章に展開される虚構の世界を、一面、外面的事件や主人公の心象で捉えつつ、他面で、それを支え、構成する複数人物の個性的描写や作者の主観的投影で補足するならば、長編の鑑賞にありがちな人物のマクロ的把握による杜撰さや、又その逆に、徒に小部

分小引用の機械的問題提示に見られるミクロ的弊害が是正されて、人物・事件のかかわりが立体的に把握されるのではないかと考えた。

(4) 各章の分析の終りに、小主題の欄を設け、その章の内容をしめくると同時に、次章への連鎖、更に全体のテーマを次第に浮き上らせるよう試みた。

(5) 「冬の宿」が選ばれたのは、それが青年期の愛読書だっただけでなく、その発表時が昭和十一年で、不況や失業問題、言論統制などのファッショ化が進み、インテリ層（ひいては国民各層）が時代の危機感を鋭く感得していた点で、現代との共通点多く、又、この作品の主題（肉と霊の背反）が、四十年後の今日にも依然新しいと考えたからである。

第一章			
人物像↓			
1	2	3	4
人物像↓	女主人公(まつ子)の容貌 三十すぎ、色白 地味な絹物	案内された二階 六畳、南と西に 面す。窓から高 い木立見ゆ	下宿に定着 家族(霧島露門 ・勤め人、輝雄 ・小三、いたず らっ子、駄子、 小一、泣きべそ)
私	大空前、伯父の 家の空気に反発 摩原はま江との 恋(金先万の愛心)	一方の壁にマテ イスのデッサン (草地の上で向 い合い、身体を 横たえる男女)	伯父も友もさは ど反応なし。移 転は四日目に実 行
まつ子	白い丸い顔、銀 音眉、黒い切長 服……		「冬の家」の印象(まつ子と 家の感じより) ・マティスの絵……嘆き合う男女 の模像に見える。
嘉門		壁止面に燕尾服 男の半身像の写 真あり(かつて のカモン像)	「海坊主」を連 想(いかり肩、 カモンは、 ぼくのクリ イが栗の大きな 頭、太い眉、吊

第二章			
人物像↓			
5	6	7	小主
人物像↓	嘉門・内田調査 局勤務(実はず と勤)	私の霧島家にお ける位置づけ(の他人としての赤 この家族の人間 関係の切斷面を 知願欲の対象と して扱おう とした。)	大學生の主人公(私)の下宿大親が、特異な風貌・性格の主人とそ れと好対照のかげりのある女性まつ子であること。下宿人として、 家人にかかわりなく生きていくとする主人公が、早くも嘉門の人物と 奔走に駆せられ、そのどちらとした人間関係に陥ることを描く。
私	厚い胸、出張つ た腹、大きな腰 (と勤)	下宿人という赤 の他人としての赤 の他人としての赤 の他人としての赤	
まつ子	スチヤンは 刺りあとの青い ずれたも の、私に告白 四角い顔	しかし、いやでもその家人と、 人情の絆を持たざるを得なか った。	
嘉門	上った徳玉、 刺りあとの青い ずれたも の、私に告白 四角い顔		

事 象 (心 象)		人物像↓	第二 章
3	2		
3 スマン世評史担 当 創持とのかかわ り (大学でイギリ ス文学を専攻)	関係 高 ・芸者・女中・ 街娼、女工な ど無数の女と	開始 下宿での生活開 始 ・朝食(大団圓 前) ・まつ子との対 話始まる。	人物像↓
聞く まつ子に教会の わかれ、昨日のやまし さがあつてか、すぐ 返答。	縁入の疑点 聞く 妻の狂信、カモンの 悪徳を平凡な人生断 面図として受取ろう	まつ子にバ イブル借り、 教会にさき たあと、讃美 歌うたう。	私 まつ子 夫・子供ら を送り出し 出勤 愚痴りつつ
私 ⇒	鳴 ・妻の欄物 の生徒のは とんどを誘	出勤 妻へのどな り声	墓 門
創持より 夏、はま江 と交際した 話を聞く。		時に 十二月 はじめ の寒い朝	居・高など

人物像↓		象 (心 象)	
1	高の移転 ・利口そう、発音なめらか、どこか落着き	5	4
人物像↓	高の下宿に 対するセン ツルメント へ勤め、傍 の温い家庭 「クリスチ ヤンと医学 生の関係は どこか冷や	教会にて 説教の始まり	新人居人の登場 朝鮮人の労働 者を診ている 朝鮮人医者、 やせた背の高 い男、ポー ドでなでつけ た髪
私	高(高)	牧師の話 鋭い文学攻 撃に反発	何となく反 高の仕事に 共感、入居 を承諾
まつ子	まつ子	私にもう誘 われないとい う。	民族の偏見 もあって反 発
嘉門	嘉門	周旋りがす まじい、 びきに変る。して同行	増居・高も 増居(医師) が、高をし ばく直い てくれと頼 む。

小主 題

カモンは典型的な女たらしである。しかし、私はそのあけすけな女性
通屋嬢を同時に傾聴している。そして、野性人カモンに親近感を持
ち始める。その他、私の精神世界に将来介入してくる大念講師刻持
や朝鮮人高が、ライフサークルに出現してくる。

第 三 章

事 象 (心 象)				
3	2			
人物像↓ なし(昔の教会通いの話を する。)	嘉門一家の生活 ・破綻 ・私はサビース ・愚昧的快 の低落を感じ つつ、なぜか この下宿より 離れられない。	私 へへのねざら いの裏面に も尽す。	高(3) 者の更生に を欲しての 下宿さがし の話を、)	まつ子 やかに質問。 私と共に高 への反発で 中座す。
男の子 ・B驚異的に短髪 う者 カモン・私・ 女の子	家の中の空気の 微妙な変化 A敬虔に振舞う 者 まつ子・高・ 男の子 を予知ーそ の現定化が まつ子の絶 望となる日 を飾る。	ひそかに、 テルオにカ ルオに好印 象を与える な血の流れ べく努力 「毎日曜の 教会を通い」 としての 夢の恢復を 託す。	まつ子とテ ルオに好印 象を与える 希望成人 して「男性 者への同情 の習癖あり」	嘉門 それを満と 女とギャン ブルで浪費 する。

事 象 (心 象)				
1				
人物像↓ カモンの訪れ ・冬の暖かいあ る朝 ・にこにこして カモン私の部 屋に来る。	嘉門 ・昨夜ポーナスの残り 女を賣った(ある友人 と共に)	私 カモンは、 はま江から からの手紙 を私に渡す。	はま江 カモンは、 はま江から からの手紙 を私に渡す。	剣持

事 象 (心 象)				
4				
人物像↓ 歳末のカモン一 家の困窮ぶりと カモンの狂喜、 カモンは私にも つかかり、高 と口論す。	私 高よりカモ ンへの激し い憎悪を示 「宗教は阿 片の代りに さん・子供 のために彼 を毒殺して やれたら」と	高(3) 拒絶	高にモルヒ ネを意図(ハ 拒否され) 似而非クリ スチャンと 高をのし る。	嘉門

小 主 題
まつ子の必死の奮闘にもかかわらず、カモンの追索は一家を破綻の
淵に投げこむ。一方、朝鮮のインテリ青年高の入居によって、まつ
子・カモンへの好悪の感情も入り交って、一家の空気が微妙な変化
を見せてくる。

人物像↓		象		象		象	
		3	(心)	2	1	象	象
カモンの散財と	まつ子	私	嘉門	私	嘉門	嘉門	嘉門
カモンにな	私	私	私	私	私	私	私
カモンに「	嘉門	嘉門	嘉門	嘉門	嘉門	嘉門	嘉門
飲食と女遊	剣持(高)	剣持(高)	剣持(高)	剣持(高)	剣持(高)	剣持(高)	剣持(高)
守中	守中	守中	守中	守中	守中	守中	守中

人物像↓		象		心		象	
人物像↓	まつ子	私	嘉門	劍持(金)	劍持との対話	2	事
私への告白	ぐられ五百 円の領収書 と奪える私。を浪費。	正直者だ びで三月 に彼の部 屋で、朝鮮	女性に激し く吊り上げ られていた	弟の急死によ る権利委譲で 金策(五百円) に成功するが、	Aはま江を独占 したいと申し 出。	Bはま江をモデ ルの小説を非 難	C友の反応と心 境の変化
仕事がつか えていたの うすくまる	吹雪の中に うすくまる	吹雪の中に うすくまる	乱れる。↑哀訴。	Aについて 私は此語。 B「写実・ 心象のいず れが小説の 主体か決め られまい」 と反論	泥水の中で 二人は恋愛 中ゆえいい かという。 B彼女を悪 くするのはやめ ろという。	と反論 に取られた との誤解に	

		事 象 (心 象)		人物像↓
		4	3	
カモン	人物像Ⅱ	まつ子の懺悔(ざんげ)	まつ子の懺悔(ざんげ)	人物像↓
カモン	人物像Ⅱ	・夜、まつ子は私に礼を言い、失神のさいの心情を告白する。	・連れの青年、警官に逮捕される。	エー「軟案」で介抱する。
カモン	人物像Ⅱ	・(一)空倒は神のいましめか、(二)あの時、海のかたへ逃げたいと思っていた、そのすてはらの気持と、(三)暴風の、モト忠者の姿を比較したあの人たちは気の毒、(四)カモンもあれに似た地獄に落ちゆく人だと思つ、(五)彼をその境涯に落さぬよう一生を捧げよう、(六)それと、海への逃避行にあてがれた自分をより返り、(七)自分の未熟さに気付く失神した。私は、体が弱っていたせいだ、車酔いのせいだとまつ子を慰める。	・(一)あの時、海のかたへ逃げたいと思っていた、そのすてはらの気持と、(二)暴風の、モト忠者の姿を比較したあの人たちは気の毒、(四)カモンもあれに似た地獄に落ちゆく人だと思つ、(五)彼をその境涯に落さぬよう一生を捧げよう、(六)それと、海への逃避行にあてがれた自分をより返り、(七)自分の未熟さに気付く失神した。私は、体が弱っていたせいだ、車酔いのせいだとまつ子を慰める。	私
カモン	人物像Ⅱ	高に借金返済を追って、私とまつ子は二人の共同行動を取る。失神したまつ子に官能の波を萌え立たせつも、私は介抱の時を来しむ。夜のまつ子のざんげは、また、クリスチャン・聖女としての態度に返り、私はその影に立ちすくむ。	まつ子	わぬ。傘もいらぬ。野郎でした」といふ。

		事 象 (心 象)		人物像↓
		2	1	
カモン	人物像Ⅱ	・映子姫居の申し出	・映子の病いを機に一家に平和到来。	人物像↓
カモン	人物像Ⅱ	・ある日の午後、門先に高級車止り、少年連れの婦人が、果物かごと木瓜(紅の)の鉢を持参。カモンに何か懸顧中。	・映子の病いを機に一家に平和到来。	士からK子をかばっているといふ。実は彼女への思いを遂げた美人。
カモン	人物像Ⅱ	・(一)妻の従姉が、(二)入院か、(三)子の従姉、Tが(あ)の女に映子は決して渡さぬと、(四)長年遺失、(五)最近、(六)父の虚勢に反発している様を見守る。	・(一)妻の従姉が、(二)入院か、(三)子の従姉、Tが(あ)の女に映子は決して渡さぬと、(四)長年遺失、(五)最近、(六)父の虚勢に反発している様を見守る。	を聞く。父親：娘を使い色々な男を誘惑しようとする。現に、カモンの役所出入りの法學士にK子を押しつけようとしている。
カモン	人物像Ⅱ	・まつ子が居なくなることには耐えられぬ。今の自分から、女	・まつ子が居なくなることには耐えられぬ。今の自分から、女	私
カモン	人物像Ⅱ	・(一)妻の従姉が、(二)入院か、(三)子の従姉、Tが(あ)の女に映子は決して渡さぬと、(四)長年遺失、(五)最近、(六)父の虚勢に反発している様を見守る。	・(一)妻の従姉が、(二)入院か、(三)子の従姉、Tが(あ)の女に映子は決して渡さぬと、(四)長年遺失、(五)最近、(六)父の虚勢に反発している様を見守る。	を聞く。父親：娘を使い色々な男を誘惑しようとする。現に、カモンの役所出入りの法學士にK子を押しつけようとしている。

主 題	事 象		(心 象)	
	4		3	
小 主 題 (章末で)私は増居より、まつ子の身体の衰弱とカモンの病気の汚染とを聞く。しかも、咲子の転居の報告を機に、カモンの咲子、更にまつ子への真摯を知り、夫婦の複雑な愛情の姿の一端をうかがう。	人物像↓ ・あの女夫婦は、男・子どもを取以前自分が破った向に残る産した時も、まつ子に離婚を勧めたと、積る立腹を私に訴える。	私 門 ・オーガスタの白痴的美を男の本能を深く包みこむ女として許す。 ・アナベラに対しては、そうした高貴ぶつた女こそ好きな女だと嘲笑。	私 ・私はカモンの好色本能を挑発し、文学や人間を侮辱させようとしていた。それはなにかいそうした自己満足に私は打ちひしがれた。	人物像↓ ・あの女夫婦は、男・子どもを取以前自分が破った向に残る産した時も、まつ子に離婚を勧めたと、積る立腹を私に訴える。

主 題	事 象		(心 象)	
	2		1	
小 主 題 (章末で)私は増居より、まつ子の身体の衰弱とカモンの病気の汚染とを聞く。しかも、咲子の転居の報告を機に、カモンの咲子、更にまつ子への真摯を知り、夫婦の複雑な愛情の姿の一端をうかがう。	人物像↓ ・あの女夫婦は、男・子どもを取以前自分が破った向に残る産した時も、まつ子に離婚を勧めたと、積る立腹を私に訴える。	私 門 ・オーガスタの白痴的美を男の本能を深く包みこむ女として許す。 ・アナベラに対しては、そうした高貴ぶつた女こそ好きな女だと嘲笑。	私 ・私はカモンの好色本能を挑発し、文学や人間を侮辱させようとしていた。それはなにかいそうした自己満足に私は打ちひしがれた。	人物像↓ ・あの女夫婦は、男・子どもを取以前自分が破った向に残る産した時も、まつ子に離婚を勧めたと、積る立腹を私に訴える。

小主 題	事 象 (心 象)	人物像 ↓
テルオへの憎悪は、カモンの失職——彼へのあわれみの形となって、私の前に点滅する。それにしても「つれなき人（＝カモン）」を空しく待って、自分の心まで「みらもなきまで荒れ」果ててしまった。まつ子の心算に深い賛同（れんびん）を感じる。	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>4</p> <p>書にふけるまつ子 のポートルレー ト</p> <p>・夜、友たちの家より煙毛し 二階に上ると、 まつ子は私の部屋で机に向い、習字の練習をしていた。</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>3</p> <p>・頭・手に包帯、連れの青年が横臥したカモンをしきりにさする。</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%;"> <p>（その書の手本） 和漢朗詠集 （その書体より、彼女 の心の支えを、私は 想像する）</p> <p>←</p> <p>底知れぬ忿怒、忘却の介 虎胎に似た心か。</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>（その書の手本） 和漢朗詠集 （その書体より、彼女 の心の支えを、私は 想像する）</p> </div> </div>	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>カモンの失職 ・翌日午後、カモン自暴して煙毛。</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>カモン（または、はま江） カモン（または、まつ子）</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%;"> <p>カモンの同僚（若 い青年の説明 ↓）</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>カモン（または、はま江） カモン（または、まつ子）</p> </div> </div>

第十卷		人物像	
象 (心)		象 (事)	
人物像	まっ子	私	カモン他
就断運動とカモンのギャンブル	・カモンと連立 ・の求職は ・いいかげんのもの (ほとんどを飲食に過ごす) ・二人は、ばらばらに歩くようになった。	・観祭の当日、母娘は人形を取り出そうと押し入るのをあける。まっ子、ふたがあたりはすみで失礼。後、不揃いの人形を楽しく飾る。	・カモンは、ギャンブルの資金にあてため、昨夜のうちに長持から、まっ子の母の形見の書物、送り着など、残らず持ち出していた。
高の消息と夢魔との対決	・過去の栄光に酔う女、悲惨な現実に沈む娘。 ・私は、春になつた海に行こうと妻子を慰める。 ・まっ子は高のことで幻滅。	・その夜の夢、巨大なものとの格闘、押さえずつけられ、首をねじりながら、必死でカモンを救うとして酸汗をかき目きめる。	・「新聞に、先日火事は放火か」とあり、テルオは高を「怪しい人だった」と冷笑する。
カモン、まっ子	夫を止めに入り	・私は否定し、カモンはなめる。	・「前にうろつ

象 (心象)			
人物像↓	まつ子	私	カモン他
<p>・私が間男した 原因として ①大勢の晩、暗 闇で妻と二人 居た。 ②留守中に、妻 と二人で同車 他出した——と する。</p>	<p>なぐられつつ、 後悔の洗滌感、 私は、夫婦の取 つ組み合いのす まを見て脱出せ んとする。 私は、出かける 女は、押しとどめ 私を押しとどめ 皆にもう一度わ びさせてくれと たのむ。</p>	<p>私は、夫婦の取 つ組み合いのす まを見て脱出せ んとする。 私は、出かける 女は、押しとどめ 私を押しとどめ 皆にもう一度わ びさせてくれと たのむ。</p>	<p>が家々を去るのを 追しげに愛う、 母への愛情を介 し、私への嫉妬 が、その探偵的 行動を促してい たのか？</p>
<p>まつ子への別れ と疎立ち ・聲をかみしめ 私を見つめ、や がて教会へと歩 を運ぶ。 ・親父の家で、 下階を引ぬぐ段 どりをして、私 は跡に出た。</p>	<p>汽車は船橋のあ たり、外は春の 朝光溢る。 冬はあの下宿に のみ留っていた のか。</p>	<p>カモンになぐら れた傷あと伏し、 身内の暗く淀ん でいたものが溶 解し出し、久し ぶりに活刀のみ なざるのを感じ る。</p>	<p>何時か、はま江 のサナトリウム の傍の森原にい た。：虚脱感、 海の白濁。 幽閑近かかノ</p>

象 (心象)			
人物像↓	私	はま江 (警察)	第十一章
<p>病室で、はま江 との面会 ・冷やかな感情 にとさされた 男女の対面 ・動機、目的意 識のない行動 ・つまり衝動 が、運命的に 人間を襲うこ とが時にある。</p>	<p>ただ、来なくなったから。 何故来たか。 ・あなたは、冷やかに 来るだけ。来る度に 辱を感じ。 ・来なかったのは、冬忙 しかったのと、遠慮が あったのだ。 私は、外へ出た。 ↓ あなたは、冬中、下宿 の奥さんに隠れて夢中 だったんだろ。</p>	<p>「車を呼ぼうか」—— 咳などこわくないと言 い、折り返ってベッ ドに横になる。</p>	<p>ホテルの一室で の拘禁 ・みぞれの中を、 海沿いのホテ ルに私は宿泊 した。 ・自分の部屋か</p>

主観
小
知る。カモンは、私との仲を疑い、まつ子をもてなすが、彼女の支
情には、妖しい眩暈の光がある。私は疎立ち、おれていた嫉妬感に
ひたる。

主 題	事 象 (心 象)	
	2	
小 説	<p>はま江の見舞いは、二人の冷えきった感情を反映したものに終る。嵐をおかしてのはま江のホテル来訪が、二人の間隙を急速に縮める。夜の抱擁は、女の生命力を吸引し、私の愛の刻印に暗い残像を残す。</p>	<p>人物像↓</p> <p>・二人は濡れた着物を次々と脱ぎ、遂に裸になつて激しく抱擁する。 生命の欲望が激しく燃え立ってきた。しかし(女の体を燃やし切らない) 自分にいらだつ。 それを表面まで燃え尽しえない。</p> <p>私は、夜中もがき続けるはま江を抱く。その時、迎えの人来る。疲れ、自分の生命力に絶望し、うつ伏せる。「あなたに迷惑かけぬ」と外へ。</p>
	<p>「ホテルに夕食を食べに来たが、雨に降られ泊ろうとしたのだ」と私をかばい、ごまかしてくれていることを知る。</p>	<p>私</p> <p>はま江 (龍原)</p>

事 象 (心 象)	事 象 (心 象)	
	2	
第 十 二 章	<p>高(こう)の</p> <p>△放火魔になつた経過</p> <p>・高は今、奈良にいる。</p> <p>△あの風の晩、</p> <p>①「罪悪的な夜」と君にいったが、実は、当日、人道院の放火魔として清涼していたのだ。</p>	<p>人物像↓</p> <p>故郷での私</p> <p>高(こう)</p> <p>(暖国の小都市郊外の河畔)</p> <p>(1)幼時のクリスチャン経験が、理に對する情しみを育てた。それが、自己否定、悪事への加担の道をたどらせた。</p> <p>②思想運動の影響を受け、あの下宿へ移ることで、一時はそれからの逃避を企みたが……</p> <p>③更切りの奇襲の反省と悪事をして恥を天下にさらせよという執拗がつづつてきた。</p> <p>④保険金目当の放火犯のドンにはくの恩人、ばくの弱さからその人の依頼を断り切れなかった。</p> <p>⑤放火犯として後罪ですもつが、その行動に對する報酬・金の魅力に負けた。</p>
	<p>△今後の生き方と私への訓諭</p> <p>・ユダヤ人の生き方を自分の生きさまでにし</p> <p>△訓諭(この手紙を君に出す由</p>	<p>私</p> <p>・父數十年市役所勤務、町中の人間関係を、知悉。</p> <p>・毎晩それを聞き、感傷的哀歎に耽る自分を反省。</p> <p>・川のせせらぎ、竹木のざわめき、ひばりのさえずり</p> <p>・仕事は教師か、富豪の書生整理。</p> <p>・学校に近い下宿屋へ入る(</p>

1	人物像↓	事 象 (心 象)		人物像↓
		3	2	
カモンの来訪 ・一月ぶりの無 言の対面	從 妹	・あるボスの信 任が篤いから 将来裕福なボ スになるかも しれぬ。 ・カモン一家に は、ぼくの行 動や心持をそ のまま伝えて ほしい。 ・数日後、就寝のめどつくとの連 絡で帰京	・たいてい。 ・は ・逃避行の間あなたの名前を借 用、女と一緒に逃げたが、今は 一人。 ・君の名は、公明正々で怪しまれ ず。 ・近々つかまろうが、その時は実 名でつかまる。元気で過してく れと。	伯父の、私の 就寝の件での 経べつをきけ る ・まつ子より送 られた私の荷 物の整理。 ・パイプルの混 入は故意か偶 然か。 ・「引越しの時 （従妹より）は ま江の病状悪 化の旨を聞く。
江島道、今日午 ↑	私	・カモン（後刻持） ・恋人の死―是 ・非参列せよ。 ・（大声でとな	・カモン（後刻持） ・恋人の死―是 ・非参列せよ。 ・（大声でとな	私

3	事 象 (心 象)	2	1	人物像↓
・はま江の移送 ・棺の上に飾ら れた装飾の花 が、若い娘の 死を悲しく物 語る。	・怒りと悲しみ で一杯 ・深い憂いにとら れて来た球をうま く返した ことで気分好転。	・自分やま江↓いや、帰って の世界から逃 れ、カモン（ はま江との交 情） 所へ行った。 又帰ってくる のは否。 ・はま江の病状を語る。 ・昨年暮よりの無軌道な行動↑ （二ヶ月間）急変・発熱・死 ます	・その明らかな断 定的ことばに、 一枚の馬券代、 に当たる金を渡 す。 ・（出発前） 今日の競馬に 是非勝つ、金 を貸せという。	人物像↓ ・殺氣まきまり わるさに愛り はま江の死亡 通知を私に渡 す。 ・従妹の病状に批 判 ・カモンとの親 交を絶く非難 ぬらぬらした 海坊主の下劣 さ（女性の前 で） ・（数日後）はま江 の死因・あの 夜の二人の狂 的な暴行にあ ると。

小 主 題	事 象 (心 象)			
	4	3	2	1
従妹は、カモンとのかかわりに死して、私の今の世界を容認しない。 はま江の死をも私の苛恨たどなる。そして、剣持も、私のエゴを 責めつつ、巧みに従妹の苛恨を誘ふ。	人物像↓ ・従妹の、知名 人の多く参列 した、金持の 家の葬式。	従妹 ・二人の所へ近 ついて来たの で剣持の話題 変る。	私 ・感動して懐疑 する。	カモン(後剣持) ・二人のこと を、立腹した が、許してや る、絶対に口 外するな……
	・サルスベリの 木の下で、あ の日のことを 告曰しようとして 私を、彼 はさえる。	・二人の所へ近 ついて来たの で剣持の話題 変る。	私へのいた わりか、私 には行く資 格なしと二 人は見たの か。	・数多いルンゲ 患者の死をふ まえ、個人の 死へのいたみ それにからむ 恨みを普遍化 させ、自分を 高めようとし ている。
	・サルスベリの 木の下で、あ の日のことを 告曰しようとして 私を、彼 はさえる。	・二人の所へ近 ついて来たの で剣持の話題 変る。	私へのいた わりか、私 には行く資 格なしと二 人は見たの か。	・数多いルンゲ 患者の死をふ まえ、個人の 死へのいたみ それにからむ 恨みを普遍化 させ、自分を 高めようとし ている。
	・サルスベリの 木の下で、あ の日のことを 告曰しようとして 私を、彼 はさえる。	・二人の所へ近 ついて来たの で剣持の話題 変る。	私へのいた わりか、私 には行く資 格なしと二 人は見たの か。	・数多いルンゲ 患者の死をふ まえ、個人の 死へのいたみ それにからむ 恨みを普遍化 させ、自分を 高めようとし ている。

事 象 (心 象)	第十四章			
	2	1	人物像↓	
・カモンは、や がてその女と 別室に消える。	・成功したら芸 術家としての 一生を保護す るという。	・私の肩を強く たたく。 ・私の借金と返 った。 ・私をある縁組 屋に連れこん だ。	人物像↓ ・従妹の、知名 人の多く参列 した、金持の 家の葬式。	
・カモンは、や がてその女と 別室に消える。	・成功したら芸 術家としての 一生を保護す るという。	・私の肩を強く たたく。 ・私の借金と返 った。 ・私をある縁組 屋に連れこん だ。	人物像↓ ・従妹の、知名 人の多く参列 した、金持の 家の葬式。	
・カモンは、や がてその女と 別室に消える。	・成功したら芸 術家としての 一生を保護す るという。	・私の肩を強く たたく。 ・私の借金と返 った。 ・私をある縁組 屋に連れこん だ。	人物像↓ ・従妹の、知名 人の多く参列 した、金持の 家の葬式。	
・カモンは、や がてその女と 別室に消える。	・成功したら芸 術家としての 一生を保護す るという。	・私の肩を強く たたく。 ・私の借金と返 った。 ・私をある縁組 屋に連れこん だ。	人物像↓ ・従妹の、知名 人の多く参列 した、金持の 家の葬式。	

事 象 (心 象)			
4	3	2	人物像↓
<p>私の青春とカモン夫妻への決別 ・(坂の上でカモン、空を仰いで、「あーんあーん」と感嘆、まつ子は黙視。</p>	<p>引越し準備のカモン夫婦 ・すでに阿礼なく、行李や食器包みが部屋に散らばる。 ・子供も親戚に引取られ、当分帰らぬという。</p>	<p>は、家の門口で消える。</p>	人物像↓
<p>・沈み行く船に群がる鴉か。 ・強いえにしないでいくだけの男か。</p>	<p>・坂の上より見たR町(倉石な市民街)は、黒々と開け、炊煙の流れを茫然と見る。 ・一旦上り、坂の上まで引張る。</p>	<p>・金策がつくまで待てと言ったはず(まつ子に冷笑される)。 ・もう遠く々々……と感りたらす。</p>	私
<p>・(私は、夫婦の気持と、私のそれを推測してみたい) ・2環境に機械的に、行動に衝動的に、生きていくだけの男か。</p>	<p>・結局、まつ子荷車に家財を積み込まれるカモン。</p>	<p>・R町に引越す。この家はもう守れぬという。</p>	カモン
<p>・(1)悪魔を永遠に見守る愛情・慈愛の天使か。 ・(2)にくい仇敵にとどめをさす復讐の女神か。 ・(3)自愛そのものの女性か。</p>			まつ子

事 象 (心 象)			
4	3	2	人物像↓
<p>・カモンは「失敬」、まつ子は「さよなら」という。 ・まつ子は、ころがる夫の山高帽を拾い、小走りにカモンを追う。 ・姿を消した車のひびきに青春の残響を感じる。</p>			人物像↓
			私
			カモン
			まつ子

事象と人間像の
総合的相関把握

私(大学生)が、冬の宿に入り、半年を経てそこを引払い、やがて嘉門に再会して、その一家の解体(引越し)に立会う別れまでを描く。

主軸は、カモンまつ子夫婦の葛藤とそれに深く介在す

主人公の内面および行動の描写にある。

カモンは徹底した浪費家、典型的エビキュアンとして描かれ、妻まつ子は夫の贖罪と一家の生活のために献身苦闘するクリスチャンである。

私は、ある時はカモンの持つ強い肉体的衝動力に、またある時は、呪うべき夫の不行跡に必死に耐え生き抜くまつ子の霊的バイタリティに激しく内面を揺さぶられる。冬の宿の外界には、相互の醒めた感情を生命の最後に激しい愛の証しに変えるはま江。そのはま江をめぐり、

私と愛情面でも思想面でも相関した存在者に位置する大学講師剣持。被侵略民族の宿命に生き、実行性の欠落した私の批判者たる朝鮮青年高。私への底深い愛情を持ちつつも、ブルジョア世界の域を脱しえない従妹。更にまつ子の子・輝雄・咲子など、数多くはないが、主人公の生を様々に規制する人物が登場する。

そして、陰陽両極に絶えず反発し続けていたかに見えるカモン夫婦が、家財を積んだ荷車を押し引きして、擬然とたたずむ私を残して、一体となってR町の奈落へと坂を下りて行く描写で、この作品の象徴的フィナーレを奏でている。

主 題 の ま と め

文学史年譜を繙く人は、この作品（昭和十一年刊）を

挟んで、前後に、八年の「党生活者（多喜二）」、十三年の「麦と兵隊（霽平）」に目を留めるに違いない。文字通り「冬の宿」は、反戦文学と戦争文学の谷間に位置するインテリの苦悶と受難を描く隠花植物に似た名品である。作者は、この作品の随所に、私の「冬の宿」逗留期は、秋から晩春にかけてのことだったが、その精神風景（心象世界）は、何時も冬景色であったと記している。つまり、日中戦争直前の、青年学徒の閉塞感がこの作品全体を分厚くおおっている。

私は、自己の内面の霊的側面をまつ子に、肉体的側面をカモンに見出すが、それは見方によれば、戦争への批判者たる自己が、同調者に転落する危機を常に胚胎していることを暗示しているとも見得る。

私の批判者たる高に惹かれつつも、剣持に代表されるインテリの姑息性、従妹やはま江のブルジョアの安息性―に絶えず回帰せんとする主人公。こうした時代と青春そのものの危機感を見事に形象化したのがこの作品といえよう。それは、肉体的衝動（戦争への加担や墮落への）にたえずおびやかされつつも、辛うじて理性的な判断力で進路を切り拓いていく一個の良心的人間の生きざまともいえようか。（S 53・3・8 記）

（津山商業高等学校教諭）